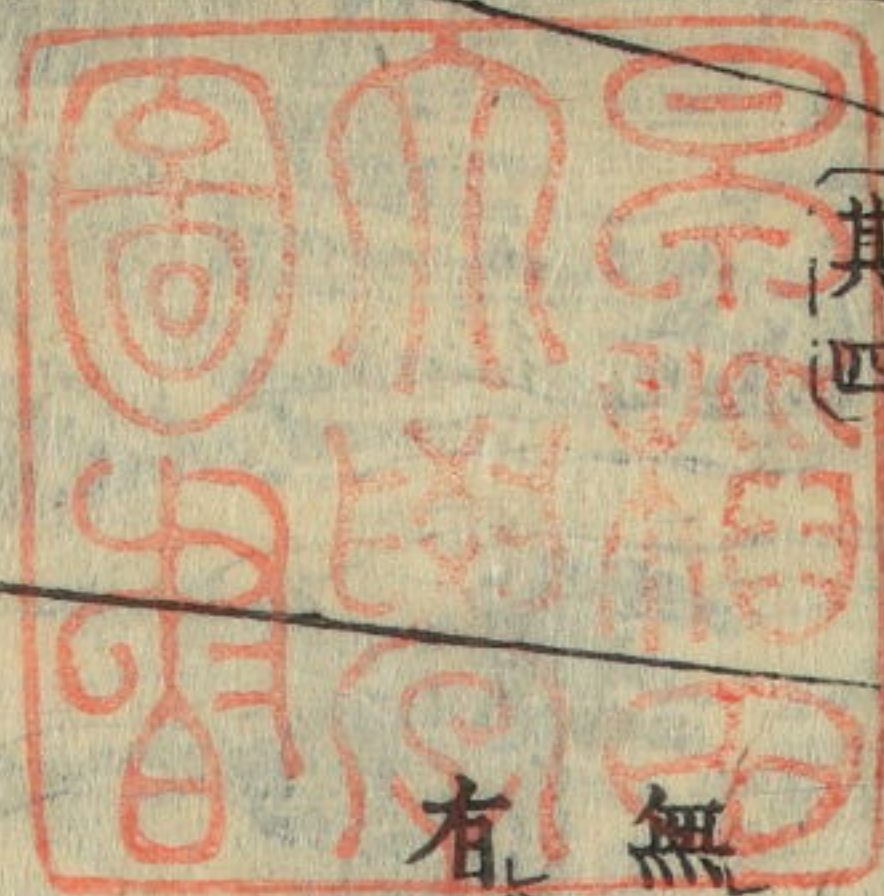


庭訓 婦女
 氷
 春山
 四



~ 13
 3100
 4





其四

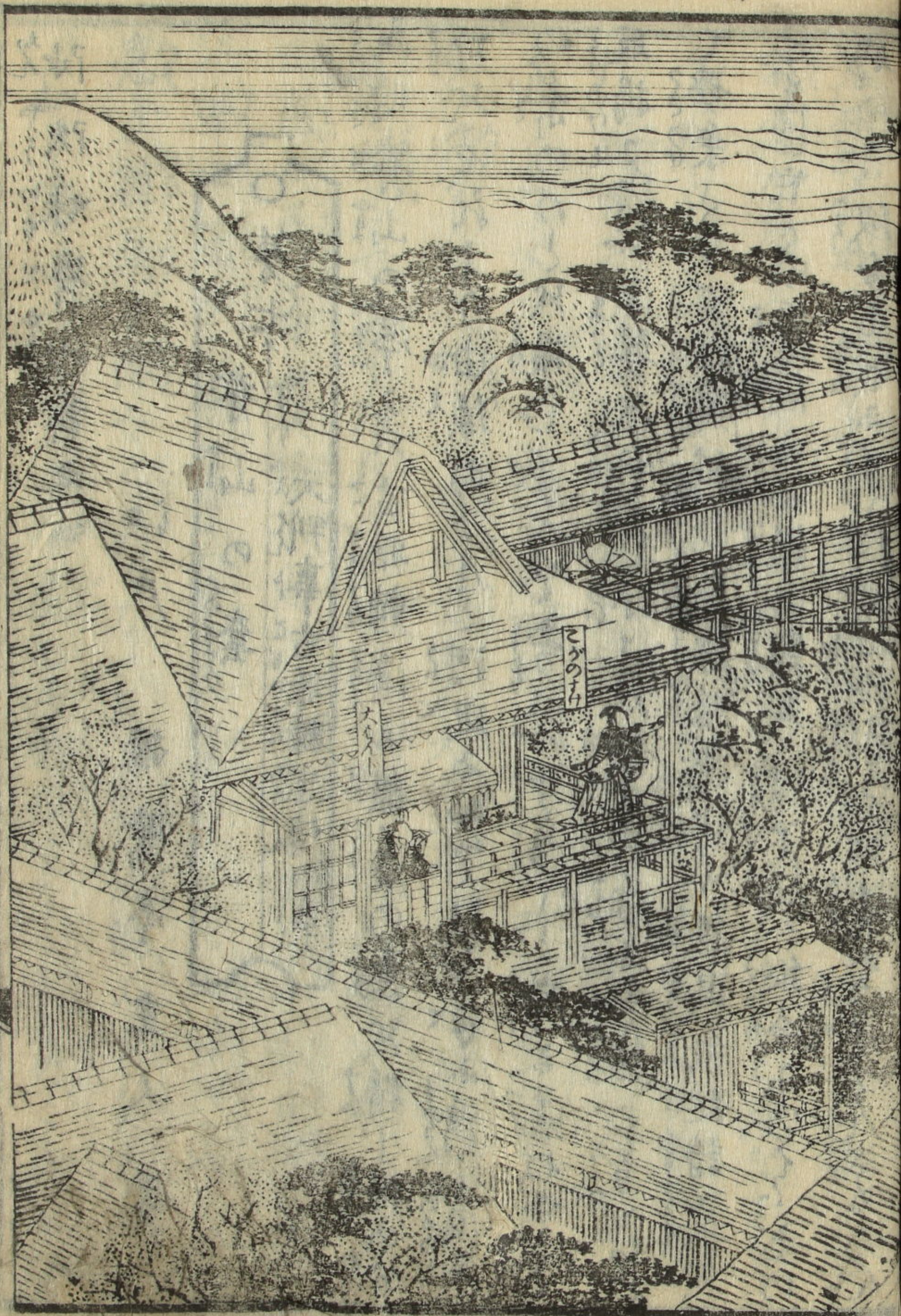
無情骨肉成吳越
有義天涯作至親

齊山大判事雅助



四之卷始





し
も
七
山

巻
之
四



其
五

し
も
七
山

巻
之
四

秋妹脊山卷之四

江戸 振鷺亭 主人 著

○第七

脊山の套

附 大判事古雅輔忠信の事

此時脊山の亭あり古雅輔遙に雛鳥の意は猜し件の分
野はこれより由縁ありんと河辺におらばらち小橋門一風箏
の糸のりといは撮る手づて弄れはすらくと岸に著ぬやぐ
取揚ふれば玉琴の舟とし小さら轎子の裡に雛鳥の首とられ
て掻乗より古雅輔はしく思推としく雛鳥我記請文は
せまじやとの西復回に雛鳥の頸に纏てし縦令あはれその
躬の首級をも我はさげ真心を彰その意ありんたるありて

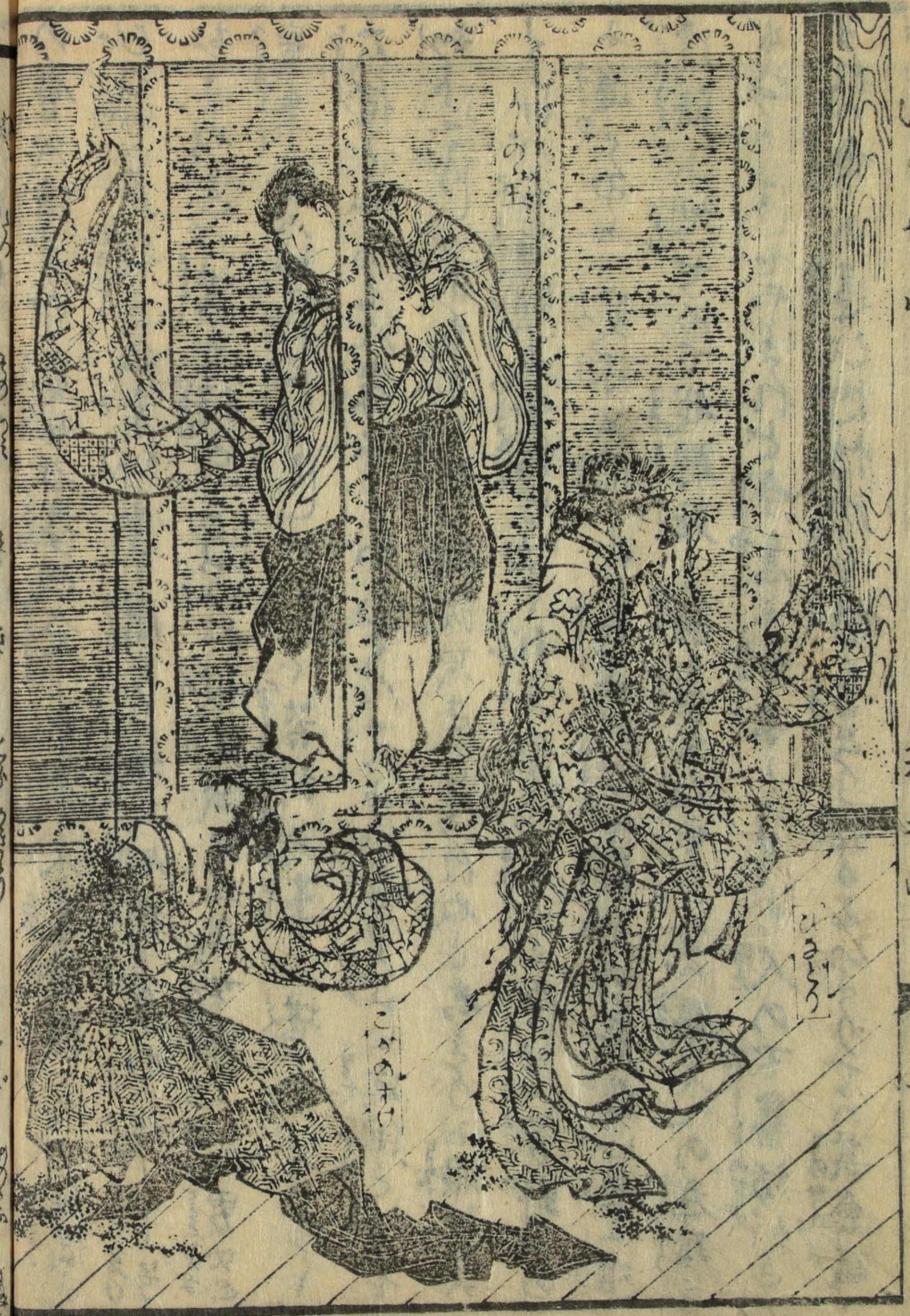
も由なれ我に繫とてあされ儂に漚の泡とき入ゆく縁あり
未憑なれこれなりとも知ぞ知まねる情さよあぢなき父の
うんやと又うりぬを芋環のいとした人の心とされ涙訣は露し
は、惆悵と彷徨わたり耐は楼上是声ありて古雅輔々々と喚ふ
ちんとおどろけ仰む直下と面と面父の大判事めてありされむ
このアタやと忙しく樓に登とて大判事眉に八字の霜は雪
を拵きて坐したれが古雅輔を近く招き聲を低ししく
王色に荒るゆふ種子として狭高と牒合せ今日你と雛鳥を
不牽牛織女の條をまへせし案のことと王情は蕩し給ひ
急と雛鳥と你を召れなす謀成就あふよろこばしや
とありのまはけ原より非道の芳野殿すくもそのくは不背

かつハいりなれ辛目み値んごらめとあへば不便中方はしにりとも
 怨を棄大功のさるる天下の為君への忠節父への孝兼清くも
 空ろく芳野殿ふま多とびよと親形がつも命だそととびよとらる
 のよりなごに頭次悦挑なくもいひついでの子と又膝を進め尚声
 成ひそめつ忠孝のしめお弄れ命何くおみ付らんいりもして
 父上の御心次易めはゆいせん種々にこころを推さるるふても女子
 なりせば宮女となり内侍所ふ近寄素懐と遠んへいりてせられお
 いかなれが此形え来女子がれを幼稚より男子の様も造做
 たるふぞ年未父上の命成まり男子の形容小版ひそ動言語
 をも女にしれ氣幸とえせまじと佐益雄の貌と作せしが今も真
 の女子となり芳野殿ふま多とびよと親形がつも命だそととびよとらる
 所を取まゆいりらんさもねくハ雛鳥難なく功成はし此方ハ
 空ろせんハいりなれ辛目み値んごらめとあへば不便中方はしにりとも
 のやにじれお良黙然とれ大判事睫を打濕しそも你を男子お
 作しその故いりふとなれが世お潜御在政則丸赤松の御曹子
 ころ次敵は匿課とるため名をも阿之輪と呼慣し独女お姿
 を儻しはゆいりせし時你をも共お男子のさぬは換へはし政則
 丸事露とるもお時你を御方にて代敵は欺く謀めて鬼神も
 測かたれ又秘密あり今こそ語父内你実ハ狭高が女見あて
 雅よりお養子とて真我子といひる雛鳥なるそやと微細次
 いりぞ古雅輔是は父のいりも呆け急おはとこととらに言はれ出
 せぬ大判事かきゆこれぬこそ深きありそもく赤松

かつハいりなれ辛目み値んごらめとあへば不便中方はしにりとも
 怨を棄大功のさるる天下の為君への忠節父への孝兼清くも
 空ろく芳野殿ふま多とびよと親形がつも命だそととびよとらる
 のよりなごに頭次悦挑なくもいひついでの子と又膝を進め尚声
 成ひそめつ忠孝のしめお弄れ命何くおみ付らんいりもして
 父上の御心次易めはゆいせん種々にこころを推さるるふても女子
 なりせば宮女となり内侍所ふ近寄素懐と遠んへいりてせられお
 いかなれが此形え来女子がれを幼稚より男子の様も造做
 たるふぞ年未父上の命成まり男子の形容小版ひそ動言語
 をも女にしれ氣幸とえせまじと佐益雄の貌と作せしが今も真
 の女子となり芳野殿ふま多とびよと親形がつも命だそととびよとらる
 所を取まゆいりらんさもねくハ雛鳥難なく功成はし此方ハ
 空ろせんハいりなれ辛目み値んごらめとあへば不便中方はしにりとも
 のやにじれお良黙然とれ大判事睫を打濕しそも你を男子お
 作しその故いりふとなれが世お潜御在政則丸赤松の御曹子
 ころ次敵は匿課とるため名をも阿之輪と呼慣し独女お姿
 を儻しはゆいりせし時你をも共お男子のさぬは換へはし政則
 丸事露とるもお時你を御方にて代敵は欺く謀めて鬼神も
 測かたれ又秘密あり今こそ語父内你実ハ狭高が女見あて
 雅よりお養子とて真我子といひる雛鳥なるそやと微細次
 いりぞ古雅輔是は父のいりも呆け急おはとこととらに言はれ出
 せぬ大判事かきゆこれぬこそ深きありそもく赤松

太宰没落の剣再ひろ君の家を真んと狹ると共盟とほ
人質として我子に互ふ交換せしめ大事のそと取捨を必
く義子を割く互ふおぼしおとらまじ金鐵の志を固め忠
のたれあへ何条子れ一人など薄おおけ表落の一滴消ば人よ
人間生者必滅の習塵と朽らん命を何われとや疎るべき
強傑おおひひが休が健氣が又るおほけ我子の事もさ
く秋高の心もさぞしと推測さく便るさよ世お子のさゆふ
かた老ふ凡生有者おあるべしや親の心の感念示はらと隔
り合さゆと狹高も休が死地お赴かざるさひつづり我
其義をさへ今さく休が女子にして宮女おはゆいせはし只
の曹女續さく貞女の及全くと尽末際離鳥と配偶
ひるがこれ親々の素心あり原より稚れ耐狹さく契物一り号
おさぬさく此も辞こさぬれ彼是はあのお女男と成男女と
変年さくおしけしけしけいも若計大事お堪へるさく
た信とやいそん孝子とやいそん艾おある今し迄泪とらを
知らざるしがあら不えの感涙さくおはれぬとまらるお眼と
くけは古雅跡も今始て笑く我身のお人男子とまして芳野の
お進とあつ実子お階して義子お扶る親父の慈悲心世も難
遭済お咽せめて我死し離るるおたさけらるる親父への孝
もあつはじをやられど今急お女子とまらるる人の不審訪が
多れば命お送し内付所を離るるさくゆるおいりて其會議

あつはじをやられど今急お女子とまらるる人の不審訪が
多れば命お送し内付所を離るるさくゆるおいりて其會議



の根が断ら其罪が躬に被り腹掻斬りゆく迄も武夫の魂
 だ経緯男子もくゆつわと詞を放りゆく大判事おろ喋りや
 とぞくぞく賛歎の声だ奉り我お迫り恩お伏し共お泪お掻られ
 しく天晴武士の親子ありつてさても又此姉妹山の棲りも狭る
 離ると膝さしづき語りも却てやふわとく感涙を促しけり御
 舟裏お云つぬハ女子ありねハ内侍所お近寄がとけもばりづく
 までも女子だ経緯べしこの心ハ古雅浦をたたくけまややくおろ
 するらまんのがや念力彼所おとぶれ古雅浦よりあごと拙言の難
 をえりししあ此方の心の奥をもちもひ知とくるまど喜びざら
 今のくくめて夫婦の縁ハ契ひ共お心の固し内侍所おと
 りんごそ専要するれいなやとくといふ舟の泪お沈と離るる母

いもせ山

卷之四

五

の前ふ慎んくめせぬいふこととるあめゆねと此躬男子なるを
女子とらりたり古雅補の心を逆それ最罪ぬくや刑をんべん命
めて何う詮みれ縁し契ん我父亡後もて真と男子なりと告
ふらふ古雅補が執善の伴もさく此躬も又罪障のむらひを
ちかけん縦真の男女もせよ今此大事は抱つ愛善の想を
努めんといふと何の詞ふやよとれんや清し心をも母が知るや
なれぞ今何をいけとらん寔尙躬と我子なりは我子といふ
と古雅補えより其躬へ女子なるをそや事情の御躬もさく
て大判奉の討かりいづとも君の所為め終る春の命を
と始より心次究双方交換せし子なるもは躬の由に男子
ひれば采いさ人のあれはしと女子とあるが今ハ母がすに

かろ臨井ふ入れやうなる耐宜とあり虧ゆる義理の苦しとよ我
古雅補をあらめはけ残忍非道の王にいらるかろん刑戮の値
もあららめと大判奉の歎想像る親とれりの心とつげれ是な
まれも女の子と育て益し天下國家の爲にもあるべし嫡流
を弄らる大判奉の心こそ悲しめらめとあ人がか子と
あいのねと世ふ徒の子なりせばあひあつてはるの使は私
不通とも古樹の花れある習と父母の許もあるぞしそれあ
らる始より男子女子なりとてとも知らぬあられぬ素の中捜し
かいて濃れた忠臣孝子の此姻縁天の媒物とともあらん持し
昵と親のり号し中なれば何憚のありあはは二世の縁は
契はく死出三津の川もとも女見やえとておく伴りれば母が飲

此よりやあふんと意も情も弁へて我を捕ら堰とせし其離る
 の辱さばあふを母上あふとれ何れ背まのせんらどののふ
 も免も角りと母の公を易れあふ最ううふ程あも悲し
 身をも命も抛と心のせらく春雨ふ哀涙坊妹脊川涙の未
 やはあふらん耐ふ又背山の棲あへ大判事一領の具足と飾
 古雅神あ對てくらくらうふ兼ととも建武の乱より天子
 二流ふ分と南北あ時と忠臣義死と妻れと你内侍所取
 奉らば北朝一の切臣より主家あ再真うとともあ何条命
 一うなどかあらん你女性なれども公と丈夫竟なれば一定仕損
 ぞははしまそされば此甲冑の父う記念ともえん後陣の首途
 後の口出とえん邦智あ長せ王うく普通あくと給

かじりか反間の謀破とば我も痛腹を搔切までよさるあとも
 我子の覚え悟といふあそと妹山を打えなれば狭高親子端近く
 起けくし此方あうめて搦く大判事斜あえあひらとを雅輔が
 武士の覚え悟の形勢その状を擬く彼方あ知とべとらあ
 具足あ挈馬あ女離の首あ矯古雅輔をいさるあひ出離乃
 首を川あさつと抛向ひを脱えあしう狭あうあも其公を
 さて女離の首ああげら離るの覚え悟いりあも何れのことよ
 其答のと離の調度あ心つた十二竹の觀粧の具あ採画あ併
 置すあ離るあ頭あ櫛を河中あかるあうとて付くあもあ
 くと投あしああいあ結髪あどのあはまじあはあ
 哀儂縁あああ大判事あその心あ杏あ惜あああ離るあ

悟の知れ今こそ親がほほして替縁一家庭因未生同蓮臺
 ちて親子夫婦のへとも一仏成道の縁を締人とちて三杯小
 舞よとく右雅捕か前あさし置長柄の籠子ふかの風争の雌
 蝶を属いづ妹と脊の山と山との隔はしどよしやありの川の
 水盃今世の縁仇ありとも身世へ一蓮詫生の折言をなし狭き
 親子小尻りせよいづや你より婚お給えんと酌りすしは
 古雅輔今へや否とも杯拳二過戴れ掲げ大判車々の杯を
 把掌の閃く機関をらうく投りし小翔る雲雀おこころあは
 雲井をばして糸くさる妹山の樓中翹々とおちらるれや狭き
 透さきと袂お受柱とちあひ公の通どりんと大判車目れと
 此縁ありてあはしむるこそ彼方より杯次場事事のうれきよ
 くと雄をの代属一加の逆子次携出の雌雄一對お相双蝶よ
 花嫁を婿よ大判車ふも煙とこそ思まらめと互の意酌うし
 えすれば又うしじけみ大判車すれおがれ声らる秋万歳
 の千箱の玉をよてはつれと壽瓶のその音の風あもやあ
 なりさすれども谿川の漲る音おすなれつりのらふ声ありの
 ちて息婦婿実煙とら所へかごと隔はれと心を一雨ふ在
 今ぞ知る実の父と母の顔えればおる目にかよとせと互の
 容向ひ遇これや妹脊の山の中お落る芳野の川に水想
 観えらり無常の梵音を昔に日西山よりすづた月東谷よ出
 かと霞がれいづりして并々其面もくくもるりあき

○傳云妹脊川（あが）流（なが）せし件（けん）の雜（ひま）れ調度（てうど）付々（しきり）紀（き）の國（くに）加田浦（かたうら）
 小流（せうりゅう）著（あ）淡（たん）寫（しや）明神（めいじん）の穢（けが）際（ぎわい）小打揚（うちあげ）られし（し）が太宰（たさい）家（け）は花（はな）
 号（ごう）の証（しやう）ありし（し）より離鳥（いなり）が流（なが）せし（し）ゆゑに則（すなは）離（り）の一式（いっしき）は流（なが）
 嶋（しま）の社頭（しゃとう）ふむめぬそよりのて古籠（ふるかご）を（を）洗（あら）つ（つ）小納（せうな）る（る）奉（ほう）と
 なりし（し）ハ此（こゝ）由縁（よしづゑ）なりし（し）より此（こゝ）奉（ほう）へ浮説（うきせつ）ふもせよ波利（はり）賽（さい）
 天女（あまのむすめ）と女人（おんな）應護（おうご）の天神（てんじん）なれハ籠（かご）る（る）古推（ふるおし）捕（とら）る（る）貞女（ていぢよ）節夫（せつぶ）
 の志忠（しちゆう）信（しん）孝悌（かうてい）の道（みち）は争（まが）感（かん）應（おう）なりし（し）人（ひと）や嗚呼（あゝ）人（ひと）たる（る）の
 夫婦（ふうふ）と人（ひと）ふハ其（その）始（はじめ）より（より）れを以（もつ）嫁娶（けあむ）夫（おとこ）ハ義（ぎ）を守（まも）妻（つま）を
 敬（うやまつ）てよく舅（きやう）姑（こ）は互（たが）小和（せわ）られし（し）はし（し）く（く）れ（れ）と（と）ひ（ひ）ふ（ふ）と（と）ひ（ひ）ふ（ふ）と（と）
 因（よ）曰（いは）庭訓（ていくん）往來（わうらい）ハ玄惠（げんゑ）法印（ぽういん）の述（の）作（さく）なり後（ご）西（さい）西（さい）天（てん）皇（こう）敷（し）感（かん）
 ありし（し）庭訓（ていくん）往來（わうらい）と題号（だいごう）が下（くだ）されし（し）とや近（ちか）ごろ何者（なにもの）う婦女（おんな）
 庭訓（ていくん）といふ（い）は他（た）く婦女（おんな）の関（かん）事（じ）とありし（し）此（こゝ）小記（せうき）せられし（し）浮（う）
 物語（ものご）なりし（し）作者（さくしや）心（こゝろ）はたふあふ（ふ）は始（はじめ）く見（み）女子（にょし）の鑿（たく）戒（かい）
 とこそこれも妹脊（いせ）の庭訓（ていくん）なりし（し）

○第八
 破御所の套
 附リ 養七勇力の事

儲王（もろおう）あつし（し）ま（ま）ご（ご）離鳥（いなり）古推（ふるおし）捕（とら）る（る）を（を）大母（おほはは）騷擾（さうじやう）する（る）ひ（ひ）に（に）
 かき寄（かきよ）る（る）大儀（たいぎ）あつし（し）ま（ま）ご（ご）に（に）奉（ほう）る（る）の火急（かきゅう）の沙（さ）はりし（し）ひ（ひ）玄（げん）蕃（ばん）
 元（もと）源（げん）太（たい）畏（おそ）りし（し）とて馬（うま）が（が）池（いけ）に（に）妹山（いもやま）脊山（せやま）の籠（かご）に（に）籠（かご）る（る）古推（ふるおし）捕（とら）る（る）
 成（なり）お（お）て（て）忙（いそ）し（し）皇居（こうきよ）あつし（し）ま（ま）ご（ご）に（に）迎（むか）へ（へ）る（る）王（おう）近（ちか）ごろ（ご）に（に）召（めい）され（る）ハ離鳥（いなり）を（を）古推（ふるおし）捕（とら）る（る）
 や（や）あ（あ）露（あ）る（る）系（けい）薄（はく）の風（かぜ）は（は）色（いろ）々（々）風（かぜ）速（はや）めて（て）御（おん）再（さい）ふ（ふ）と（と）怨（うら）
 く踏（ふみ）れ（る）情（なさけ）急（いそ）の王（おう）と（と）や（や）公（こう）深（ふか）き（き）堅（かた）く（く）起（た）り（り）と（と）く（く）二人（ふたり）ハ（ハ）多（た）く（く）撮（とら）

ハ
 卷之四
 十



多くは美女美童の其艶々翠の黛花の唇のあやいらをよそ
 ね瞳をちむく瞬し右と左を撫さるりしづれをいばむと損がじ
 もいふと良幻なりか人々宣ふやう古より乱の匪降自天生
 自婦人とのり夏桀の未喜殷紂の姐己周幽の褒姒晉獻の
 驪姫呉王の西施衛公の宣姜とよ後世の美人めて國を傾し
 りのなり雛鳥が容色とこれらめもさるる優うん但女色のこ
 れむくは妖孽みつと西の男色も又うれ事には中華あも
 男色の行つるもいふをく経傳に載るり周穆王慈童を愛
 漢哀帝董賢をめて衛靈公彌子瑕およよ漢の高祖も
 籍孺おほくとい唐の韓吏邦も孟郊もまよひ東坡も風水
 洞の遊をうると鄧通併お安陵龍陽これと男色よ名あり

男色のるり天竺あもりのとくく大悲華経に説くその名は押
 輶といふ唐土あてん非道と云吾朝ゆん若道又衆るともりて
 吾烟衆道のいじめん弘法の身真雅なるの業卒の童形の肘
 曼陀羅丸と云し肘懸想せし誤りて弘法といふるはかの
 光源氏を蟬が身の小君も男色の心あれ文がうあもよそ
 けり我は男寵のおとさるる事や久しいかへお名あ児子
 若衆その負笈多して菅阿見竹生嶋の童子書寫山の乙
 若既南朝よ松帆丸のりて其名世小まことへね總て昔より美
 少年の人か害ある事女色小又な多ればこそ尚書小頑童は
 ちるげくべうさばはしをりり我くむうり美色の害のれ事
 知はるも公みだれてやむせうや右雅浦が若危風流をいれ宋

朝が美はおう道祖王の侍童とてもなむおとびるんあらし
 かと母と宣つひと古雅浦を後懐小抱離るのを引く今
 酒宴もいふことありて張臺の内ふ入給へ
 侍候の人ふたふ唆り退ぬを蘭質の舟に移せが秋
 の露志むく晚し王の虚心ふ二人を倚り左右抱ふひ今より
 古雅浦を寵愛し夜の離るふ伽とせんとてつとせしめ
 小舟に遠く岸破と記す舟のわが若しや我皇三遇夜之遇
 魔石の法を修む耐今至りねと少且勒行の間休等をし
 差向ひ些もりのいふめふ曲事なり腰斬八裂少もるをべた
 ぞ位痛事事形うれと命じてさも厳あそ起る舟後も二人
 隣近く在る面ハ射せるがらもりのいふめふのうりかた緊し死余
 不法をなす堅舟を慄わするが良ありて雛鳥古雅浦の耳本の
 けんよせ王のいふる怖し魔術のくえも妙ぞ我今細み羅し
 奥ふゆとけ形をりして内付所を棄去んはめく容易にあふ
 ぞいふく金剛心を物し忠義の魂を固むやと密舟も小語は尚
 古雅浦も声だをそめてはしめりるやめれは舟王の心目ふ
 ちのり男子ある事露れふとや被となりるんいふはささるふ
 やとりのが離るるれがやそのののにじりよりのそん悟めて借腰斬
 八裂ふるの形の脱ぬまきまに遠る王をく一撃するこのみうや
 といふものも一声叫と喚りが又もるれ小其牙の腸より驚愕せ
 竹割ふずぐと折れ血をろとちどじて倒る古雅輔その所たど
 ぞえとぞ遠れた憧憬つても今破る緒られと内付所を目かす

しんせし

卷之四

十一

奔ゆるんとししし小誰折ともろ其も又膝の下次衝貫と
 號もあどうち股を割るなれ鼓と倒るおのぼろ雨乃肘
 翠とくくくと天井を翺めぬ其形勢ぞ怪たれされも羅
 腰の連折ざるが真二ふり裂人ととれ其若しと右雅捕と骨
 推く肉ちぎとんとと其苦さるる急の袋中て苦不腦
 乱し血不塗まじ擲けりもたぞ呻吟小號が付お咄と嘆め
 銀燭燦然と白日のごとく霧上坐あは王飲然と河在
 左右ふ伺候の面々笑多居なれ二人が闕らほし其形勢を
 えかり笑ひとよやくみぞめりけと王二人お對めひ你もが分際
 あく我眼を脱んとされけい當おびる事なるふいふしとる
 企して已とらむしむ可笑さまと哈々と哈ふと又捕の腕を撫る

やうなる聲して戀ハ心の外とわやあはけけとさなれけいけい血も
 ば我魔術は以你をもが意なきふりしゆもれば活もかみ殺
 をかみはく責又心も隨るが支地ふ本の體とまじ給てん骨
 髓よりける其夢のあこれ若げなれいすく心も保るまかえ我
 みのわく我魔法の奇特あれば此後いとの害心なく我小仕よ
 さあふがゆけし給るんぞと呪咒を唱卵を解とやあふ者々二人が
 牙體本のくくは股全なり一泉の傷多と雲むりの血もあふて
 古雅浦雛鳥抱と抱と居くらけりたれ夢のさる心地し列
 居る人々みえるよりも肝まんと画を赤や痴すとあは著著坐の人
 めなかりしやと笑ひ舞おそ玉あはをよは赤酒真宴の真して
 さて其夜の御遊ハゆらぬかくて其次の日王あせ出されけるを

我即位してよりいさご大嘗會を行ひしに其促ありしとの
 御事なり柳大嘗會と申御事天子代々の流例にして大極殿
 少て被行其儀式大壯うる事ども少て賤室乏しは芳野殿急
 斯れ大れと行しんるるくかろひささけれは日野有光公は實親々
 高儀したるふ此事支ゆるも一とひ君のあみすれ事翻りかご
 くれは盲目おつさくせたまふ事こそ律假の儀式あてさまはし御
 耳ある本式のちうに申觸へしと其昔は諸司百官の中ふくめ豫其
 促めりえれど一ツにして整ことしし盲目の玉あかくとも知召さま
 辰よかりて大政官の廳にお出御ありて既にお大れを行はれ儀式い
 ると聞せしゆふまの分野の備儀が芝居めて歌舞不行粧るとよりも
 いと様勢げらるるふそ有光公泪がたるとるがう洞はるるしく勅答あり

くれは凡太礼と四海善方の経営なれば諸衛禁門も陳烈も四種の
 錦幡が立置衛士の撃鞞の雷霆の雲上も夷うとあやしとる紅
 旗風も翻翻々々これ飛竜天下揚玉幡日お照々として鳳凰空
 裡おかけらるるさかづら金殿鳳閣の床よハ七室莊嚴を伸衣冠
 とも錦欄と重しれば寔にお前代未だの壯觀りてとる例もくみと
 形もなれ虚言はさもいふしじびも奏同のれは王相々としり鼻
 らごめし給ふ其附階下に伺し玄蕃左派大次始め阿る小人等
 齋くこむ万々歳と唱しん畢竟これ嬰兒の戯おはしくいふもえ
 とれお侍なりりて浩應お人々鬼りとも知と一の阪より登りくる
 者あり各々めやしみく足をとらん中は其長七尺余の大の漢子
 面の鬚も熊の荒毛おひじく左右へそりわたりさるさほお裂裂勢

虎よりも猛く邪め短褐被藤柄巻の山刀鑄せり
 九尺余の鐵棒杖踏大歩み踏つて洋々
 禁門み入庭上ふ立跨て大音めて呼々
 中の是ハ浪速の浦不行居る贖せと申者めては宮城
 や啖ると言て喧は驚れ玄蕃左源太記ひ天子の御前も
 惶らと傍若無人の奴くま吐され贖七呵々と笑ひ天子を
 いめわかしえらいと我貴許の酒をりめて竟め價を敷んと休
 我を欺くこと敷るのいざや給ふと責められ玄蕃左源太の
 鬚み此烏帽子を搔素袍の肩に縮は理なぐ今日大社の
 おこらなれば再と参れよと声低くハ尚高怒不暮りさも
 わるバ月郷雲客の衣冠を引剥が冠頸を契て飯りるん

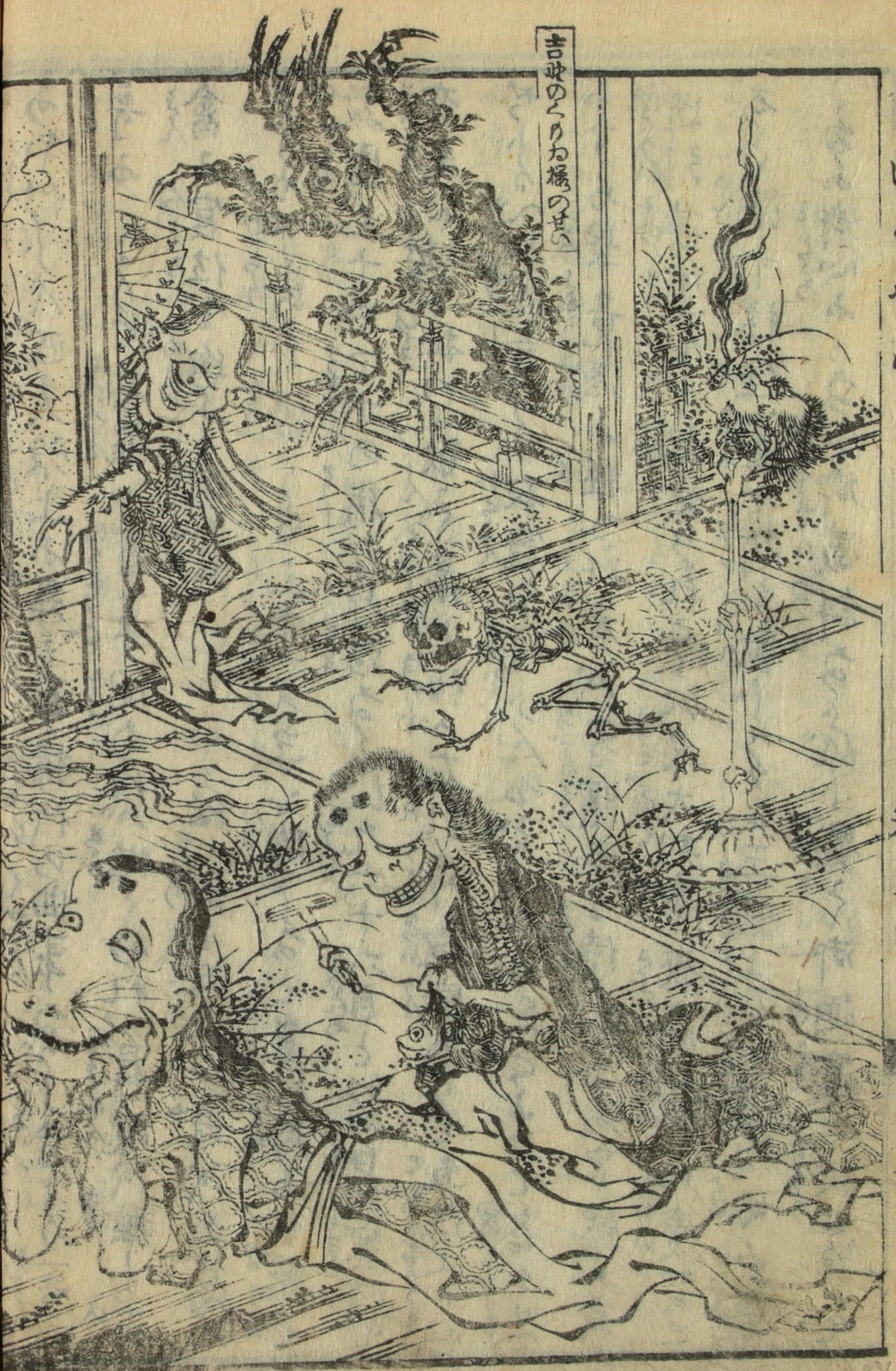
入さうきさうく吼るふ今ハ味子法外の雜言のよ
 取らん根藉りのめり五番の宿直おて赤れと喚ひ仕下
 引と前番をくくとおとり圍矢おり拵構より張七
 北叟咲我血弾あども足らぬ紫山子ふひとした奴原に
 ろ志ける天子の威光と狭酒の價以價わども威の矢と
 て去るところおしひと我此五體ハ金鐵いざも射てんよ
 階の上ふつと躑より破と睨てまより大膽不敵の取勢
 お清御新とて駭劇を有光公王丸間近しあつれよと製
 鈴みめも饗七ハ尚競ひ一天万乗の君められ供御の酒
 支もあふと送送せられ酒の料凡六十六目三分五釐書
 りてさる價とびつがやん五分五厘も引はしと尻を折て

と堅鐘のぶら声響し御所中も裏つる王御耳を時
 おし玄とよしたるは同々入櫓て何なる書属しものたかれ
 ばかりぬとめれば續よよとおみするにそ有光公兼うて懸せより
 件の書属を撮く聞くるふ不足の酒の料をあるせられれば敷
 小達せんもいじと声をかきあて流まがしつるあやう一つ酒代
 六十六本年の十一月朔銀とも是の歌のつぬはしと直とも
 てみねのささうらうらび恋歌みんどもありとれどと眉と聳て宣
 い簾七焦燥く恋もい借渉をよとのみ緒や吐々といふて手
 行を極りのと若じてそとくさすう寢腹小生まらぬ王價
 みの事と知るさうりけん奇のさう詞さうねど去年の十一月朔を
 恨と白妙の雪をや泳いけんそも是の地下ありそとをたれ

あや付く人匹夫殿上お昇る奉栴代の曲事なう昔より一首の
 奇ゆよりて其罪と容事同めれば始くかれう日拜殿次聴し飛
 禽は官位を興める例なればほもあは給は假五位の爵成あへん
 せりも下良の優くも三十一文字と聯しんと賞給ふを懸七
 敦園二十やは十の端なれば歩あふに九十六目といふ口次塞清て
 有光公袖と扯つ敬ぶ兼と妝がたれ奇感ありて五位上は叙
 せらるべた宜旨より衣冠を賜ふんやとにこころへこよとて各々共
 おすめ畢竟酒ふ狂へれ者次容謙さる侍しそよあや簾七次
 透引其の坐をそ起せられこに又大判事狭高今日の慶賀と
 あく酒十樽佳肴十折を獻しつるあ王原より大酒好み更
 ころの御心やうらひ御感斜るべし懸く御酒宴を促さるを



あうせ



吉母のころか籠のせし

此皇居は侍の百官百司とりつゝ野伏凶徒の類は今日
無礼を恕し打屈輪と大酔さへし初命に皆く好りかじこ
躍つ又王日耳肉食の好む鹿猿狸兔猪鴛其外目馴ね
諸多と牧多摘おろを治るが屠殺庭前小柴火煎煎し
て或ハ脍とし美火としみ十指の酒を庭上小置て飲やうに喰やせ
ゆまてハ抓啖など杯盤狼藉いん中りも好く芝生の上を踏し
おろしくお劇狂つて謡弄あつた濫行ハ土民等の饗さるをて
もあるはじく猿勢うりけるる体ありかて終日の大飲お勞を
うろく君の酒量ぬん恨がじとこる畏伏てやけは王鼻ぐま
あつたひ此入の簪七や冠とあつた耐は簪七掛の太布ひこえん
堂と装束一魏々と冠と被りし何とやん心分おまゝ鞋
ハ菓子踏んぐ出つ五位上簪七罷物とけつと暢うれハ王大杯を
りげ給ひ今日大酒の會に我お敵とる者なくかの鴻門の會よあ
ねども我頂羽が勢あり你又樊吟が勇あふよく一石の酒飲んや
と宜の簪七完尔と打笑命す君お捧ぐ何条一石の酒飲
ゆんやとつくと庭上おありと酒と斗余あつたれ樽の底ふ
て手とけ七目よりさくはあげ天盃と湯りぬといふまゝに飲は
はと當とつくと香勢ひ完鯨の潮を吸あぐとくまてもこ事や
あな心地よやと満坐動御音する王も壯哉々と初とすう言はし
給ひ禦士を勇士の恒とする所なれど強て暴酒する時ハつたれ智
勇の考も大事ハ失するそじとや止るんくと宜ハ此附日己不暮退
出の左側あるが習い泥のごく酔つ坐と起る海鹽おとし酔

中 卧て懸くぬ為体なり王宣ふかき空なる勞伏我もいそ酔れんが
 とも睡らん侏儻豪華傑なり我枕上不在今宵の宿直せよ籠七
 不のせせよ其侏儻と枕臥し多ひふり比しも夏の夜に園中よく
 夜もそや深々とし只雲井に子規の音つゞのこもりしう颯と吹る
 松風小御殿の燈火消庭面の叢葎不飛の螢の闇と照とのみ
 ありしに怪哉我鼻梁の前ふらりと突出しありよとくそれの長
 一尺余の檜木の床と貫く急中生出しが耐るぬ花の盛をんを
 さしりの簾七もろひりかけぬ奇怪不目腫しが妖怪よしての優と妻
 化よとどひの香々この櫻木庭上揺れた出つ忽ち一株の大木と成
 声々做くりりやう我へこれ此御苦野不年孫る雲井檜の精霊なり
 いふや一踊して今宵の幽と交入とて動さ出る其さぬ人の躍るが

一 枝を手のとく 幹は胴体は根をそのこく踏で
 すらりりららとて踊るれハ簾七最おりりた車に心い匍匐し類
 杖はよ余念うく見かゝるが却しんんと傍不ありけるかの後をゆを
 以寄さん一振閃せ其後為花の景えとたり散乱とあをそそ不
 烟霧のゆくえへかたえ子似て蒙朧と消失る簾七あらくらとと
 魑魅罔兩の類る欬又りれ破御所の荒のこはされば妖怪なるよ
 出まうたふもあゝばかれと夜とこもにさのしべたふあうら何と失へそ
 亦何ぞ出よしと待たるるに庭の小篠系とくくと音して茶燈臺
 の形をうせし歎昔火陰々と燃あがりぬ頑哉とえれがこころの扉
 下より人の見る脚おとの响不只これは何等の者ゆふらばとよ
 との音も経良頃刻せしはと子簾七待倦まふ文伸せし不忽

のた

巻之四

一ノ

冷^{ひやま}たりりのこそ出^いりりこそその居^{かま}長一丈そりもあつらんこゑの
老^{ろう}婆^ばなり眼^{まなこ}の鏡^{かがみ}の光^{ひかり}をばしは瞬^{まばた}の際^{きり}まで割^やれぬる面の皺^{しわ}凸^{こぼ}
凹^{ぼく}彫^うなせれやうして何^{なん}お繪^えふる母^{はは}りのかた顔^{かほ}のうらうが荆^{つばき}の
白^{しろ}髪^{かみ}搔^か分^{ぶん}てけりくと嘆^{なげ}ひ黄^{あふ}夜^よ不^ひ独^{ひとり}さびしくや坐^まらば此^{こゝ}所^{ところ}
おが自^{おの}がむとめのもてれば夜^よのくればまて伽^かま多^{おほ}まるほりと云^いふ
中^{なか}がて半^{はん}部^ぶの隈^{かみ}よりあつりのあり五^ご衣^い不^ひ紅^{こう}の袴^{はかま}と曳^ひあし文^{ぶん}何^{なん}丈^{ぢょう}
あつらんも知^しれぬと長^{なが}さと思^{おも}髪^{かみ}なげとたが長^{なが}廊^{らう}下^かの末^{すえ}知^しら
を永^{なが}く面^{おもて}を枕^{まくら}胎^た蟲^{むし}の滑^{なめ}とほし目^め鼻^びゆりてたうう眉^{まゆ}連^づのこゑ
々^さたるは袖^{そで}と掩^{おほ}らち微^{かひ}晒^{あび}するその忌^いとさほゆりんぞうり煙^かの
咄^{はな}勝^かし後^{あと}不^ひ侍^{しやう}り女童^{おんなご}へ頭^{あたま}車^{ぐるま}輪^{りん}のどく體^{からだ}ハ矮^{ちやう}人^{じん}より小^こか老^{らう}
波^{なみ}宮^{みや}女^めともにも磁^い子^し土^{つち}釜^{かま}を勤^{しん}まへ縁^{えん}七^{しち}世^{せい}も駒^{こま}と白^{しろ}眼^{がん}はけり
あれはこゝ真^{まこと}も分^わりやとて妖^{あや}怪^{かい}多^{おほ}忽^{たち}ち搔^か消^{しょう}て失^うぬ簾^{すだ}七^{しち}ぶふやう
是^{こゝろ}等^らハ狐^こ狸^りの所^{ところ}為^なり目^め足^{あし}何^{なん}ぞすとも死^し目^め醒^さりのこそ出
より今^{いま}度^どハいりりるれ変^{へん}化^げや物^{もの}れと待^{まち}居^ゐり時^{とき}しもらとあれ
家^や鳴^{なり}震^{ふる}動^{どう}夥^{おほ}しく坐^ましこれ疊^{かさね}蟻^{あひ}と起^{おこ}上^あり即^{すなは}ち天^{てん}井^{せい}小^{せう}妙^{めう}こと
さしあげられぬ其^{その}肘^{ひじ}簾^{すだ}七^{しち}世^{せい}も些^ち少^{せう}おそれ何^{なん}等^らの妖^{あや}怪^{かい}を中^{ちゆう}
えれば西^{さい}面^{めん}これ阿^あ呼^おの二^に玉^{ぎよく}牀^{せう}下^かより半^{はん}身^みを現^{あら}し左^さ右^うの臂^{うで}と掃^は
目^めと努^{ふる}め其^{その}勢^{いきほひ}すまらぬと目^めと終^はるり簾^{すだ}七^{しち}世^{せい}も目^めと濁^{にご}乎^や
志^{こころ}といふ眼^{まなこ}不^ひ一^{いつ}瞬^{しゆん}のれが空^{くう}拳^{けん}乱^{らん}墜^{たい}とといへり百^{ひやく}怪^{かい}万^{まん}怪^{かい}んが
おそるに足^{あし}らん當^{あた}山^{さん}二^に天^{てん}門^{もん}の金^{こん}剛^{かう}力^{りき}士^しの雲^{うん}慶^{けい}湛^{たん}慶^{けい}の名^な作^{さく}
なりしかややつるが今^{いま}こゝに出現^{しゆげん}して背^せ力^{りき}競^{けい}とるさんとおやし
我^{わが}怪^{かい}刀^{とう}の布^ふと衣^いらんよやと力^{ちから}足^{たり}ぬと踏^ふく上^{うへ}より推^おけられぬ

卷之四 七十一

下より上へ推し進めしといふ且ぐほいと挑み争しが鬪七力や勝てぬといふと本
 の精も推下より其の附鬪七大鐘と技て多らくこれの普通の所
 変るるは其のなを天魔の大王こそらに消せれといふも海
 撃面母差神しりや、眠らせ給ふ王と只一搏と争ひしり小玉
 能然起立し鐘の柄を握むと合ふたまひ玉殿燈消く時五更
 此鬪と照とそその螢火ふまればこれ及びり鐘及びて我と勝て
 ぬ公めり人双々もぬとりてこれに北朝の刺客あてりぬと
 と双眼及びり眼角及び張え給ふ面鬪七に向君と立目目
 御坐つと笑はるが突ハ御目と之とぬぬめやと向ハ王打飲嘆ひ
 見えりともく螢火ハあちち我两眼の一天四海と照ハ大千世界も
 見えりともく當昔仏弟子と対帝位ふ登るなり方使ふ賢
 と見えり今ハ又魔道の謀略とそ我技術あて怪異とあてりし
 が剛膽及び試しにうろく抜羣あるうねと宜ふ声も凜々なり鬪七
 をもと懼と階下に平伏とさこそあちち君の意を試さる權喪ハ
 尾薙の器動寛仁大度ふえいせられ山伏なる峯入の及びり鐘
 不忠心のうろくれかれ英主に奉仕辱さよ不肖ぬぬぬと日來
 力業及び好兵法おも老子の九變ハ原ハ孫子と十三轉の變化も
 学大刀討ハ名取得る中村五郎祐直とト者あてい今より忠勤を
 奉励へしとやけれハ王頭を掉さるひ赤松家の浪士とわれハ心は
 かに我性七過人及び試と後腹心とそ你うとれ勇敢の者ぬぬぬ
 さしなりまこと精忠とあちちぬぬぬ人質とりて死よと宣ハ鬪七
 笑て人質及び進くる事何よりいと易しきうが再々参内つる

と見えり今ハ又魔道の謀略とそ我技術あて怪異とあてりし
 が剛膽及び試しにうろく抜羣あるうねと宜ふ声も凜々なり鬪七
 をもと懼と階下に平伏とさこそあちち君の意を試さる權喪ハ
 尾薙の器動寛仁大度ふえいせられ山伏なる峯入の及びり鐘
 不忠心のうろくれかれ英主に奉仕辱さよ不肖ぬぬぬと日來
 力業及び好兵法おも老子の九變ハ原ハ孫子と十三轉の變化も
 学大刀討ハ名取得る中村五郎祐直とト者あてい今より忠勤を
 奉励へしとやけれハ王頭を掉さるひ赤松家の浪士とわれハ心は
 かに我性七過人及び試と後腹心とそ你うとれ勇敢の者ぬぬぬ
 さしなりまこと精忠とあちちぬぬぬ人質とりて死よと宣ハ鬪七
 笑て人質及び進くる事何よりいと易しきうが再々参内つる

らめとりめて坐と起しうご心中の望と失ひ頭を投り出し春後
見えぬして王長柄の碁子に把すと搏つてあかきを身と姓と碁子
の酒を草薙お侵り忽拈く其又変るをこの不測と入れん王
宣ふ其酒昨夜妖怪が給しん你勇にを命り飲るが毒お死させ
を今又我鏡鏡を脱るるの智勇全た彼とじかむるに再會を
忘れぬそ忘るる你酒の價ありその代ふの十樽の酒を料とせん
你よく一人くりていゆるんやと戯るるの饜十喜ひ面は満りと
より好めれ酒なりおいもかゝる勅命のあふ難遣中と之拜九
洋しやがて何まるそとこれれば件の酒十樽を庭上おきく鐘層松
木の伐倒せし九太やりてよありて小楡としおのりの大綱を八重十
文字お懸せしれを肩より腋お掴むると脊負はると二王立ち起
しんハ其儘二王の荒作り夜叉羅刹の態お異なりは此二
顔色変せと洋々と鉄撮棒杖と大跨み歩ゆくその形勢
山の揺動がごとく曙句の紫の芳野の皇居お聴と且日本一
の剛の者由じかりける次第ありけり

珠脊山卷之四畢

